

〔箋注倭名類聚抄燈火具〕今本玉篇火部云、羨俎下切、竹部云、筵、莊雅切、俎、莊并屬照母、乍屬牀母、清濁不同、此作乍恐誤、按廣韻有筵、無羨、玉篇有筵、羨二字、不云筵、羨同、然說文有羨、無筵、則知筵俗羨字、故云字亦作筵也、蓋羨本訓束炭、轉為炭籠、故從竹作筵、○中今本玉篇火部云、羨、束炭也、竹部云、筵、炭籠束炭也、此所引蓋竹部文、按說文、羨、束炭也、顧氏蓋依之、其作羨者、隸體不省也、

〔下學集器財〕炭斗

〔和漢三才圖會三十一〕炭斗 須美止利○中

按炭斗多用瓢、或蒲筍竹籠任所好、

〔三中口傳三〕一鋪設裝束事

火桶并燈臺事○中 居火桶者、置物厨子邊可置炭取、

〔散木弃詞集十〕みすとの炭なきをみて

すみとのすみもとられてゐたるかな

つく

ひもおこされぬ火をけのつらに

〔寶藏四〕炭取瓢單

許由に棄られて後、岸根の波にうきにうけども、たゞ名にながれたる計にて、顔淵はえて其樂をあらためず、それよりこのかた、こまの出しめづらしさも打たえて、花の名のみ人めきて、あやしきかきねにおひまげり、なりさがりてぞ侍める、○中 中比利休居士の取たてにより、數奇屋のうちにもめし出され、貴人の御めにもかゝりなど、器の時をえて、鯨をさえしまれもの、手にはよりもつかずと聞及べり、

えだ炭はむべも火花のつぼみ哉

經仲